

三才児の絵画に関する一考察

野 口 栄 子

On pictures by three-years-old children

EIKO NOGUCHI

序

3才児とは、生後満3年0ヵ月から3年11ヵ月台までの子どものことである。この時期は、医学や心理学、精神医学の分野で問題の多い時期といわれ、さいきんとくに脚光を浴びている¹⁾²⁾³⁾。歯、脳、内臓諸器官に顕著な発達段階がマークされた。また言語中枢や運動機能の発達にもなることばやあそびの進歩も指摘されている。そしてそれらを支える精神面の成長につれ、反抗、赤ちやんがえり、問題児の発生など、将来の人格形成にも影響を与えるような大きな問題が登場しているのである。

わたくしは、3才児の絵画について検討した点を、ここでいささか考察してみたい。そして3才児の問題のさまざまな展開にたいして、絵画という特殊な一面からのアプローチをこころみたいと思うものである。しかしながらこの研究は、3才児健康診査という社会活動に参加することによつて生れた。そのことは、この問題がたんに絵画の問題にとどまらず、3才児の人間性全体につながるということに関連している。そこで (1)3才児健康診査のもつ意味とそれにたいするとりくみの姿勢について、(2)絵画のとりあげかた、(3)実際の画面から、(4)結語という順序で考察をすすめたい。

1

3才児のもつ心身形成の複雑なメカニズムに関連して、児童福祉法第19条第2項では、3才児健康診査について次のように規定されている。「第19条の2 都道府県知事は、毎年、期日又は期間を指定して、満3才をこえ満4才に達しない児童に対して、厚生大臣の定める項目につき厚生大臣の定める方法及び技術的基準による健康診査を行なわなければならない。②前項のほか、都道府県知事は、必要に応じ、妊産婦又は乳児若しくは幼児に対して、健康診査を行なうものとする。③都道府県知事は、前2項の規定による健康診査の結果必要があると認めるときは、当該妊産婦又は乳児若しくは幼児の保護

者に対して、児童相談所、福祉事務所等の指導を受けることを勧奨しなければならない。」というのがその全文である。そして厚生省はこれを実施するために、昭和36年に告示第262号で全国に3才児健康診査を指令した。一般的な発達増進の意味のほか、聾児や精神薄弱児の早期発見がこの時期に期待されるからである。

わが国においては、従来、子どもはおおくのばあい、誕生いらい小学校入学(あるものは幼稚園や保育所入園)まで、統括的には、全く診査を受ける機会に恵まれなかった。しかしながら誕生以後、一定の時期まで児童を家庭にのみ託していることは決して好ましいことではない。もちろん、よい家庭環境は児童にとつて望ましい影響を与えるにちがいないが、その家庭すらも児童にとつて完璧な場所とはいひ難いのである。たとえば、どのような立派な家庭でも、保育所や幼稚園のもっているような集団生活を児童に体験させることはできない。集団生活の問題はしばらくおくとしても、他の児童との社会的な比較をおこなうことができない。そこで、3才児健康診査のような機会が、就学前の児童のためにぜひとも必要だと考えられるのである。そのような組織を完全なものにすることこそ、福祉国家へのひとつのあゆみだといつてよいであろう。厚生省は告示をおこなつたけれど、その具体的な方法は何ら明示しておらず、いまだ全国的な統一も企てられていない。その実施法は、児童の心身の発達を真に検討しうる時点にまで高められたものでなければいけないと考えられるのに、全く不完全な状態である。そこでわれわれは、まずその方法に関する問題から出発する必要があるのである。

しかしながら、厚生省の告示より以前から、すでに3才児健康診査の意味と必要性を力説し、その実施をおこなっている研究グループがある。滋賀県立近江学園研究部の田中昌人氏を中心に、京大の発達心理に関心をもつ人びとが、大津市衛生課の協力のもとに、大津市に昭和33年以来実施してきた3才児検診と0才児検診(乳児検診)がそれである。この活動について、本学客員教授近

註1) 園原太郎・黒丸正四郎：3才児，NHK テレビ，1964年4月～1965年3月。

2) 中脩三：三才・五才・七才，東部書房，1964。

3) 中脩三：幼稚園からではおそすぎる，東部書房，1964。

江学園長糸賀一雄氏は、次のように述べておられる。

「…これまでの5年間の研究をふりかえつて、しみじみと考えさせられることがある。それは、はじめはおおざっぱなふるいわけをして、いささか問題徴候をみとめた乳児をのこして精密検査をするという方法をとつたものが、新しいスクリーニング用のテストを考案して、受診児とその母親全員に教育的な意味をもつたふるいわけができるようになったということ。これはたしかに一歩も二歩もの前進であつた。

それのみではなく、精神のはたらきの動く姿をとらえようとする精密検査が確立して実用化されるようになったということ。これはあえて言えば、テストとしても画期的であるといつてもよいのではなかろうか。そしてその精密検査は1回300人程度であるから、年2回で600人、そしてそのなかから年間70人程度の問題児を、今後継続的な検査の必要な子どもとしてえらび出したのである。この必要性は、こんごの研究の進展によつて次第に幅がせばめられることが期待される。しかしいまの段階では、まだ、切迫流産とか、流感にかかつた母親からうまれた子どもとか、ひどい黄疸の子どもまたは未熟児などというのは、それが現在から将来にかけこの精神障害の原因となるものかどうかはあきらかでない。現在の段階では予測はむづかしい。つまり現在の診断にたしかさが認められるのは10年後なのである。

そういう意味で年間70人程度の問題児は、過去5年間にわたつて約300人に及んでいる。しかも発達におくれをもっている問題児70人の他に、現在おくれではないが、妊娠・出産・乳児期に病気を経過したもの約150人がくわえられて1年に250人というものが、年を追つてわれわれのリストに累積する。円錐をさかさまにしたように、逐年累増するのである。そして、現在の診断が真に確認されるためには、リストにのつた問題児たちを発達のいくつかの壁につきあたらせながら、少なくとも今後10年の研究を必要とするのではあるまいか。そして10年たてばそのときにはまた、新しい診断技術の深まりの問題に直面していることであろうと思われる。このようなことを考えてみると、この研究サービスチームの仕事は、とても前途遼遠であること、そしてその意義のおおきさと深さというものに、改めて思いいたられるものがある。

早期発見ということの重要さはいうまでもないが、その方法と技術は、精神薄弱対策の基礎となるものであることが、はつきりした。そしてその方法と技術の探求

は、地域住民の福祉活動という広い地盤で問題となり、それが専門化されながらさらに地域の福祉に還元されるという構造をもつのだということを、しみじみと考えさせられたのである⁴⁾と。われわれは、このような活動が、すでに日本の社会のなかに開始され、着々とその成果をあげていることを喜ばしく思う。そして、京都府のためにも協力して、とりくみの姿勢をとりたいと思う。3才児の問題は、いままさにこのような時点に到達しているといえることができるのである。

昭和38年くらい、わたくし自身もこの大津市の3才児検診に参加する機会を得た。そして、3才児の発達を知り、問題解明に役立つ方法のひとつとして、絵画を描かせる仕事をおこなつた。

3才児健康診査の目的は、もとより3才児の全人的な心身の発達と問題性にとりくむためのものであつて、知能テストなどだけが目的ではない。上述の研究グループは新しい精神過程の測定法を確立しているのである。そしてとくに3才児のように、精神的にもさまざまな面で複雑なメカニズムのあることが想定される対象児のばあいには、感覚を中心にした検査がのぞましいのではないかと考えられる。人間性の本質を解明し、人間存在の最も人間的なメカニズムを解明するために、わたくしは、人間の感性について検討することが適切であり、その方法が工夫されねばならないと考えている⁵⁾。もちろん具体的な方法については、いまだ解決の方向が見出されてはいない。けれども、人間の感性的なものを基盤にした、感性の所産としての美的なもの——とりわけ芸術作品を制作したり、観賞したりするような作用を通して、上述の解明がおこなわれはしないであろうかと考えている。そこでそのひとつの試みとして、3才児に絵画を描かせるというとりくみをおこなつてみたのである。ころよく3才児検診に参加させてくださり、その方法についてもいろいろと御教示くださつている糸賀一雄氏、田中昌人・杉恵氏御夫妻、および大津市衛生課のかたがたに心から感謝したいと思う。

2

3才児について、感性を通して観察されることがらを調査するといつても、その方法はさまざまに考えられるであろう。感性的なものを基盤にしている芸術制作に注目したときにも、音楽、文学、美術、演劇等そのジャンルはまことに多様である。そこで場所や時間の制約を考え、しかもある形態が明確にあとにのこるという条件を

4) 糸賀一雄：精神薄弱児の早期発見—大津市乳幼児健康管理委員会について，健康管理，東山書房。

5) 拙稿：児童福祉における感性の問題，京都府立大学紀要，1964，75頁～80頁

みたすものとして問題を美術に限定してみた。それでもなお粘土細工やフィンガーペインティング等は3才児検診のような場所ではむりだということに思い当るであろう。そこで画用紙とクレオンを使つて絵画を描かせるという方法がのこつてくる。しかし絵画といつても、こんどは課題画・自由画・写生画などその範囲はきわめてひろいことが判明する。そこで、できるだけ自由に自己表現が可能な方法とは考えると、やはり自由画を描かせてみたくなるであろう。しかし自由画では、めいめいの子どもたちが、好き勝手なものを描いて、整理のとき收拾がつかなくなつてしまうにちがいない。わたくしは自由で、しかもその自由に何か共通のメルクマールを抽出しようとするような制限を加えるという方法を考えてみたいと思つた結果、自由画を2枚描かせることにした。最初の1枚は好きなものを描かせ、2枚目はできるだけ1枚目と関連しながら、しかもある一定の限定を加えて、自由さのなかに共通点があり、その上2枚目でも表現の自由さが増すような方法を考えていたのである。まず子どもに画用紙とクレオン（25色）を各1枚目にナンデモスキナモノヲカイテチヨウダイネといつて描かせ、コレナニとこちらから質問する。その答えをきくと、言語の状態も判明するわけである。多くのものが描かれているときはさらに、コノナカデイチバンダイジナモノナニときく。幼児においては、絵画は純粋な形式のみにとどまらず、言語や知識とむすびついた総体的なものであるから、児童の反応のしかたによつてさまざまな手がかりがえられるであろう。そしてイチバンダイジナモノを指摘させ、次いで子どもたちがそのようにして自分で画面に描き出したものを、どのように2枚目において処理するかを問題にするべきだと考えたのである。そこで田中昌人氏の御指導により、1枚目のソコニカイタモノもしくは多くのものが描かれたときにはソコニカイタナカデイチバンダイジナモノを2枚目にモットタクサンカイテチヨウダイネといつて描かせてみることにした。これによつて、モットタクサンというこちらのことばの理解のしかた、それにたいする判断のしかた、数の概念をどこまで利用できるかなどの多くの問題が推理できると考えたのである。また児童の絵画は、児童の全生活内容と密接に結合しているので、言語も数も判断力もすべてが包括されて、はじめて絵画の問題の解明がなされたと信じたからである。この方法は、3才児の前にすでに近江学園の精神薄弱の子どもたちに実施して、多くのよい点を感じていた。しかし、精神薄弱児のばあいも、

まだ充分なまとめはしておらず、3才児についてもほんの少しの問題を考えてみただけである。そこでここでは予想しうる問題の指摘にのみとどまるほかはない。こんごもつと多くの子どもたちに実施し、問題を整理しなくてはならない。しかしここではすでにおこなつた3才児の600枚近い絵画のなかから、とくに3才児に固有の問題として、考察しうるいくつかの事例について記述し、こんごの問題展開に役立てたいと思う。

3

3才児といつても、生後満3才0ヵ月から3才11ヵ月29日目までの段階の子どもたちがいる。そして発達的にはこの間にかなりのひらきがある。絵画活動においても3才0ヵ月と3才11ヵ月の間にはきわめて大きな変化がみられるのである。

子どもは一般に、生後満18ヵ月ごろからエンビツやクレオンを握る方法を会得すると、ものの平面上に線をつけはじめる。「なぐりがき」と称される段階で、線が次第にぐるぐるまわりの円に変化していく。そしてハーバート・リードも指摘しているように⁶⁾「手頸の運動が、腕の運動にかわり、指の運動が手頸の運動にかわる」という時期にたちいたるのである。そして線が次第に意識的になり、腕の筋肉運動から脱皮したことを示すまるや三角、交叉線、ていねいなぬりかたなどがあらわれる。そして次にこのマルがオモチやオリングに似ているということをも自分の力で理解する。これはすなわち子どもたちが、3次元的な立体的な世界の存在が、2次元の平面上に図式化されることを会得したことを示すものである。

ぐるぐるまわりのいわゆるなぐりがきから、形を発見する段階がちょうど2才から3才への移行期にあられる。したがって普通児では、ぐるぐるまわりの線を描いていれば、2才の終り頃、何かの形一意識的なまるや三角が描ければ、2才から3才への移行期、そして人の顔など描きはじめているときは、その子は実質的に3才になつていとみてさしつかえないであろう。そして2才台で顔の描ける子は、いわゆる精神年齢もすすんでおり、3才になつて描けない子は、少し知能がおくれていると考えてよいと思う。もちろん絵画を通して知能をみるのが目的ではないが、私のおこなつた上述の調査では、画面と知能の間にきわめて興味ふかい関連がみられた。このかぎりでは絵画活動は知能的なものをも包括しているといつてよいであろう。

まず、事例1（図版1, 2）はCA3:00才、MA3:0才、IQ100⁷⁾の女子。

6) H. Read: Education through art.

7) CAは暦年齢、MAは知能テストによつて測定された精神年齢、IQ（知能指数）は $\frac{MA}{CA} \times 100$ として算出する。

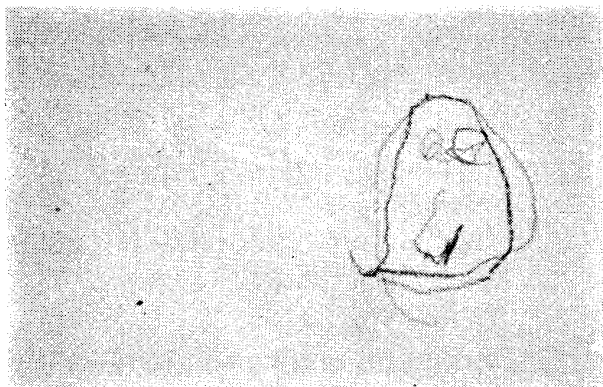


図 1

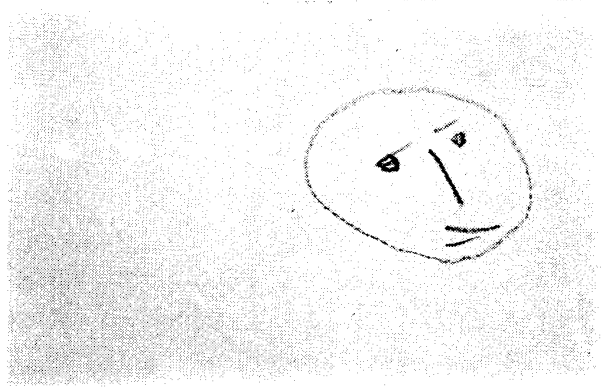


図 3

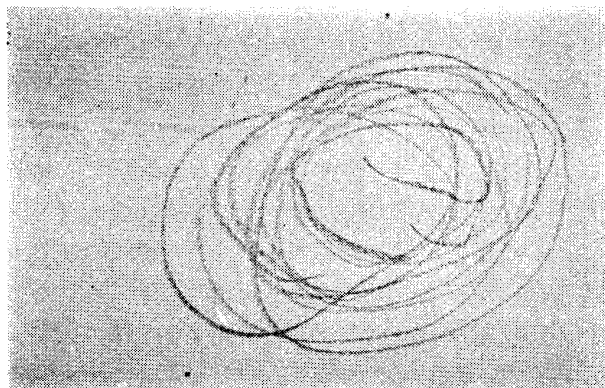


図 2

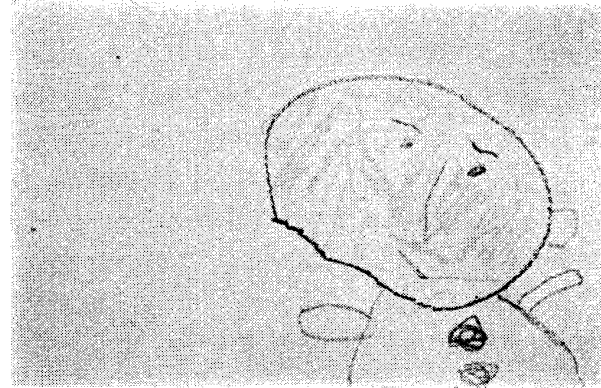


図 4

1枚目は朱色で顔を描き、フクキテルといつて外側にまるを加えた。2枚目は黄色でぐるぐるまわりの線を描いた。こちらのモットクサンという要求に彼女はこのようなぐるぐるまわりの線を描くことで答えたのである。彼女にとってこの線はかなりしつかりしている。中央から右手で左側へまわす反対まわりの方向もできている。1枚目の顔は、さいきんやつと描けるようになったものであろう。まだたよりなく、フクキテルとところまでは描けないので、ぐるつとまわしてフクキテルと説明しておいたというのが実情らしい。CAもMAもともに3:0才であり、観察によつても判明したが、きわめて普通状態で発達している。3才になりはじめの、いわゆるぐるぐるまわりの線と顔が互いに明滅して登場する点がよく了解できる。このような事例はかなりある。

事例2 (図版3, 4) CA3:1才, MA4:9才, IQ154の女子。

CAが1ヵ月上ということもあつて、事例1の子より、かなりしつかり顔を描いている。1枚目は輪郭線と両目と下唇が赤、眉毛は橙色、鼻と上唇は茶色で、いちいちクレオンをとりかえて描いた。まず輪郭線を引いて考え、自分の口を指して下唇を描き、右目を描いてオメメ

といい、左目、右眉、左眉と描く。そしてマチュという。マユゲとマツゲが混同しているのかもしれない。次いで鼻と上唇を描いておしまいである。そこでコレナニカイトノときくとカオと答えた。この段階では顔とその部分が子どもにとって問題であり、おそらくオメメとかオクチという自分の顔の部分を理解したことがつよく作用して、この画面を描かしめているのであろう。2枚目のモットクサンカイテチヨウダイネというこちらの要求には、精いつばいもつと大きな顔と洋服と手を描いた。顔と唇の一部が赤、眉毛と目と鼻、手、洋服は橙色で耳が薄茶色、顔の輪郭線の内部を肌色で塗っている。顔の輪郭線を描いたあと、眉毛左右、目鼻口の順番に描いて、クチベニといつて口に赤をちよつと加え、オミミといつて耳を描き、顔を肌色で塗り、手と洋服、ボタンを描いてアシカケナイワといつてやめたのである。3:1才なのに2枚目が1枚目のつづきの具象的な顔で、前よりしつかりしており、洋服や手が増え、大きさも、表現力もつよまっているのは、知能がたかく、感情の豊かさを示すものといつてよいであろう。色数が多く、ひとつひとつの線をていねいに処理している。顔を肌色で塗るというような企ては、珍しく、この子が確固として落ちついたものを身につけ、伸びてゆく可能性を多分に内

包していることが判明する。顔のゆがみや、体とのバランスのとれなさなどは、3 : 1才というCAからすれば当然で、その点も事例①と比較すれば了解できるであろう。

事例3 (図版5, 6) CA 3 : 9才, MA 4 : 7才, IQ 122, 女子。

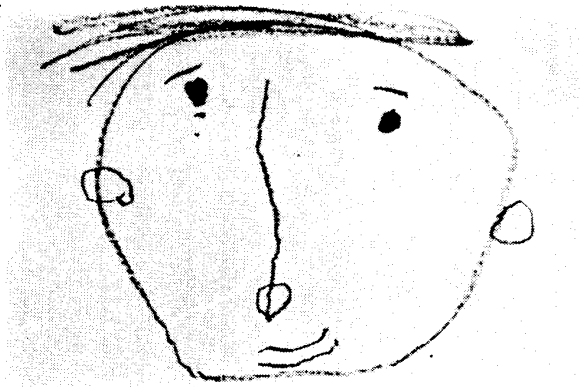


図 5

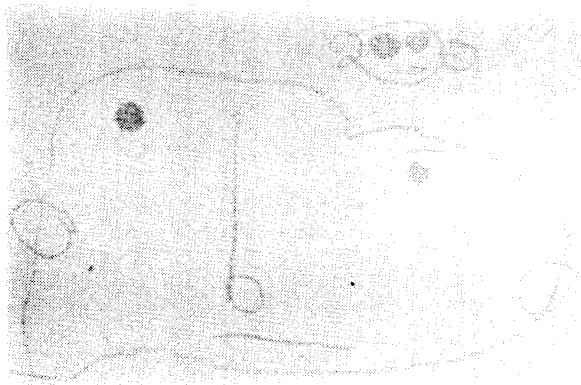


図 6

1枚目は赤で大きなまるを描き、次いでクロイロシヨウといつて紺色をとり、眉、目、鼻、口、耳、髪の毛順に描いた。コレナニカイトノときくと、オニギョウと答える。ジャソノオニギョウモツトタクサンカイテネといつて2枚目を渡すと、こんどは肌色で輪郭線を描き、右の眉と目、左の目、鼻、口、耳の順に描き、オニギョウサンノアカチャンカコといつて上に小さく顔を添えた。ソレナニ?ときくとオニギョウサンという答であった。MAも高いが、CAが3 : 9才になつている。そこで1枚目の顔は、画面一ぱいに大きく、しつかりと描かれ、顔の諸部分にも遺洩がない。説明はたんにカオでなくオニギョウサンという現実的なものに結びつけている。2枚目はもつとたくさんと要求されて、まず1枚目に描いた顔をもつとずつと大きく描き、ついでに画面

の上を、もうひとつ小さな顔を添えるために空けた。そしてオニギョウサンノアカチャンという関係概念をもちこんでいるのである。これは、MAの高さだけでは解決できないもので、CAの高さによる生活経験の豊富さと判断すればよいであろうか。われわれは、事例1や2ではこのような数の増加を期待しえない。モツトタクサンといつたときに数を増し、増したものに一定の関連づけを与えることを、われわれは児童がその生活のなかに体験していくものとして理解せざるをえないのである。したがつて、3 : 0才や3 : 1才のときの知能の高さには、生活体験の裏づけがともなつていない。そこで、ただちにMAをもつてその子を規定し、それによつて指導をおこなうことは全く危険というほかないであろう。

1枚目に描いたものを2枚目でもう少し大きく描き、同じようなものを小さく添えるのは、他にもみられた。これはその典型的なものである。

事例4 (図版7, 8) CA 3 : 8才, MA 4 : 6才, IQ 123, 女子。

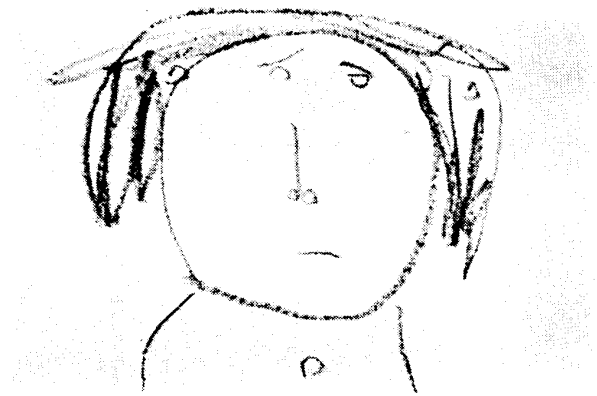


図 7

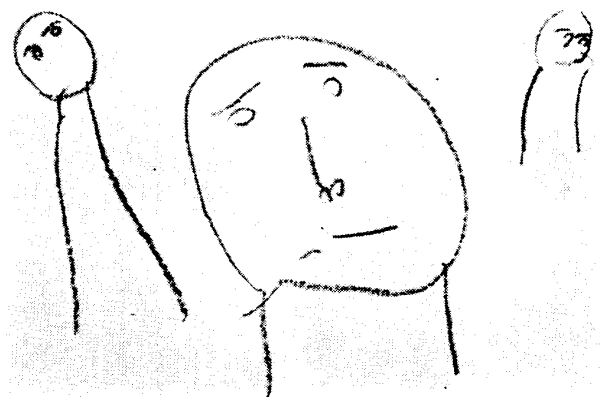


図 8

事例3と同じような関連がみられる。CA, MAもほぼ近く、IQも似ている。1枚目2枚目とも赤一色。どちらも描きかたはしつかりしている。1枚目はオカオカ

クといつて輪郭線、眉、目、鼻、口、髪、洋服の順で描き、コレナニというオカオと答えた。ジャオカオモツトタクサンカイテネという2枚目のように描き、オトウチャントオニイチャンと説明した。2枚目の中央の人物は1枚目より簡略化されているが、モツトタクサンという要求によつて3人の人物が配合されている。そして、オトウチャンオニイチャンという身近なものと具体的に結びついている。そしてわれわれは、ここで他の画面と同様にこの子の知能とともに生活体験と、それによつてつくりだされるこの子の人間性の質といったものに気づかされる。それはどの画面についてもいえることであつて、画面を通してわれわれが知ることのできるのは、それを描いた子供の人間的な内容の質の面である。われわれは線とかたちと色彩のなかから、われわれに訴えかける質的なものを、何がいかにかかれているかという問題と同時に読みとる努力をしなければならない。それこそ、児童の感性を正しく知り、またそれによつて児童を生かしめようとする問題の根本的な意味でなければならないであろう。

事例5 (図版9, 10) CA4 : 0才, MA4 : 1才, IQ102, 男子。

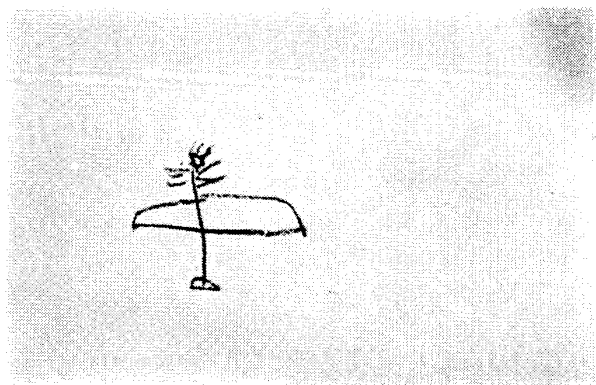


図 9

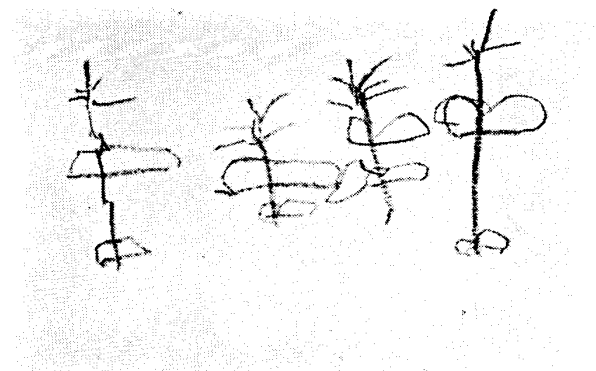


図 10

2枚とも赤一色。CAが4才になるとモツトタクサンという要求を完全な数の増加としてうけとり、1枚目と同じものを、2枚目に平均して増加できる。もつとも、3才後半からこの傾向はあらわれるが、このように、かなりきつちりと似かよつたものを並べるのには、やはりCAの高さが要求されるようである。子ども自身の説明もヒコーキとはつきりいう。これしか描けない、またはたまたま描いたらこうなつたのでなく、スキナモノを描きなさいといわれてヒコーキをえらぶのだという態度が芽生えてきていることがわかる。欲をいえば、色の変化や、内容の豊富さがほしいと思う。

事例6 (図版11, 12) CA3 : 2才, MA3 : 3才, IQ103, 男子。

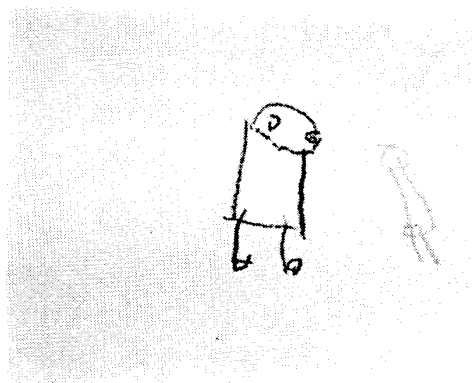


図 11

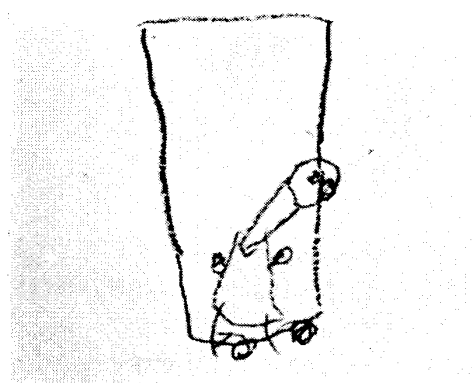


図 12

事例1と2ではCA3 : 0才とCA3 : 1才について見た。CA3 : 2才になると、MAはそれほど高くない、このような簡略化された人物の組合せがみられる。1枚目は向つて左側の人物が紫で、これから描きはじめたものである。クレオンが紙に触れるときキュッキュッと音をたてたら、コンナニキュッキュンナンデイウン？ときく、カミニツヨクコスッテサワルカラヨと答える。目のところではココメガネ。足をつける。そこでやめる

のかと思い、コレナニカイタノときくと、ニンギヨタンヤ、コンドコレカコといつてピンク色のクレオンをとり、向つて右に小さく人物を添えてしまった。コレナニイロ?と質問するので、ピンクヨと答え、つづきにソレナニヲカイタノ?とまたきくとニンギヨタンヤという返事である。ジャツノニンギヨタンモツタクサンカイテチヨウダイといつて2枚目を渡した。そうするとクレオンを一生けんめいえらんでコレナンデキュッキュウイウノ?ベツノクレオンハキュッキュウイワヘンノ?という。白をとつてちよつと左隅に横線を引き、アカヘンコンナンミエヘンといつてやめ、赤で四角い輪郭、次いで橙色で人物を描く。コンナオオキナデンシャダレカガノッテハンノヤと説明してくれた。人物は1枚目の2人が1人になつてはいるが、電車に乗っているという状況設定がつけ加つている。モツタクサンということ、この子はこのような理解した。2枚目にも人物がくりかえし登場し、クレオンが音を出すことにも引きつづいて関心をもたれている。2枚目は1枚目の画面をぐつと凝縮させた形式でまとめられている。表現意欲が1枚目から2枚目へかけて高まり、モツタクサンがこの子にとって質的な作用を及ぼしていることが判明するのである。

事例7 (図版13,14) CA3:3才, MA3:6才, IQ108, 男子。

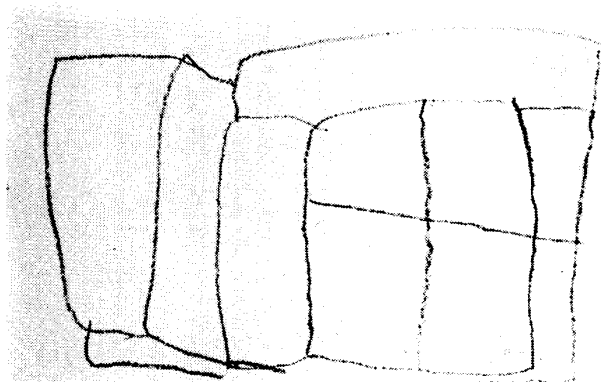


図 13

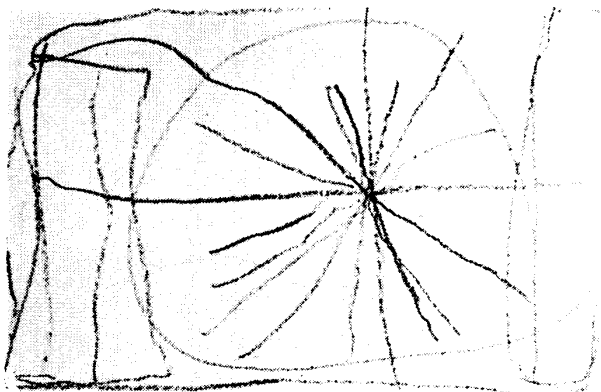


図 14

1枚目も2枚目も茶色ばかり使つて、1枚目についてはオウチと答え、2枚目は黙っている。1枚目は四角の連続であるがオウチとは思えない。しかしこの子にとっては、このような2次元化された形態が、オウチという概念と結合していることは確かである。そして2枚目ではその形態をもう少し複雑にしてモツタクサンという要求に答えている。このようなやりかたはこのほかにも多い。

事例8 (図版15,16) CA3:4才, MA5:0才, IQ175, 男子。



図 15

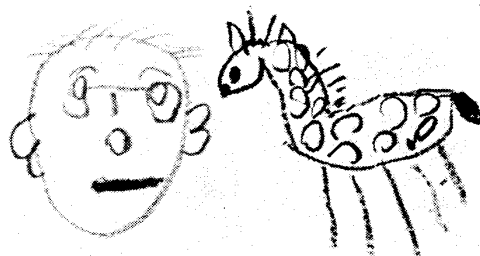


図 16

ナンデモスキナモノカイテチヨウダイといわれ、茶色のクレオンを握つて、1枚目の麒麟の胴の部分に先に描いた。そしてコレスイカといつた。それからどんどん頭と足をつけていった。そしてタテガミ、アシ、麒麟ヤと説明した。足が1本多いので横からお母さんが、足が1本多いでしょと干渉する。麒麟ヲモツタクサンカイテネというと、2枚目に茶色で麒麟を描いたがこれも足が1本多かつた。次に緑のクレオンをとり、ハ

ツパヤといつてぐるつとまるをかき、つづいて顔にしてしまった。オカオ、メガネと説明してくれる。1枚目に描かれたものが、より大きくなつて2枚目に再登場し、それに全く関係しない他のものが付け加えられるという2枚目の変化がみられる。一枚目の麒麟は、模索しながらこの子が掘りだしたという感じをうける。しかし2枚目は1枚目の模写という印象がかなりつよい。モットタクサンのうけとり方が観念的なものになり、子どもの表現意欲は顔を描くことによつて満されたのであろうか。きわめて示唆に富んだ画面といえよう。少し高すぎると思われる MA との関連も、残された問題である。

事例9 (図版17, 18) CA3 : 6才, MA3 : 6才, IQ 100, 男子。

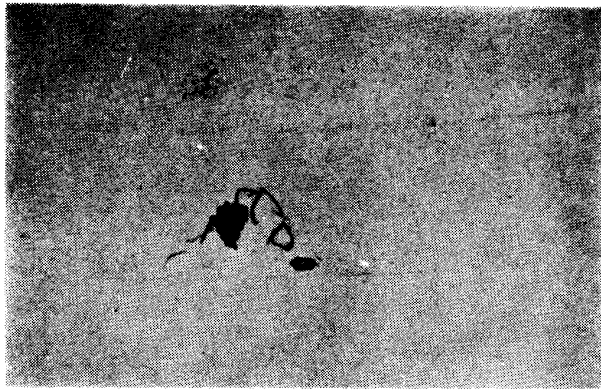


図 17

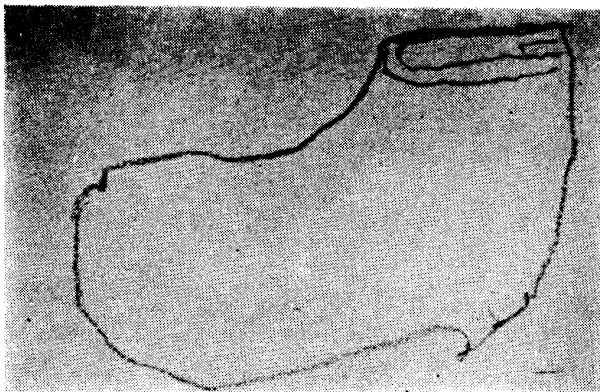


図 18

これは上述の諸例と少し異なっている。1枚目2枚目とも緑一色で、1枚目はちよこちよことわけのわからないものを描いた。ソレナアニときくとハナと答える。ジャソノオハナモットタクサンカイテネといつて2枚目を渡すと、こんどはぐる一つと大きく描いてオフネという。この子はふだんあまり絵画など描かず、外で遊んでばかりいるそうであるが、1枚目のときは、何を描いて

いいか充分わからず、ちよつとごまかして、2枚目ではモットタクサンといわれて、大きく描き、それが船に似ているということを意識して、オフネと答えたものと思われる。3次元的なものの2次元化は、それを視覚的に発見することによつて理解のうちへとりこまれる。子どもにとっては形を描いてのちに命名するということは数多くみられる現象である。

事例10 (図版19, 20) CA3 : 3才, MA2 : 11才, IQ 90, 男子。

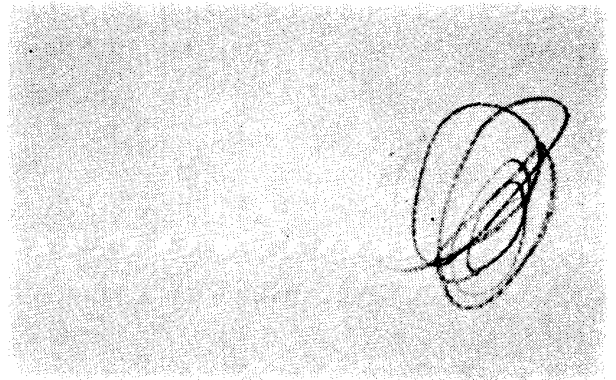


図 19

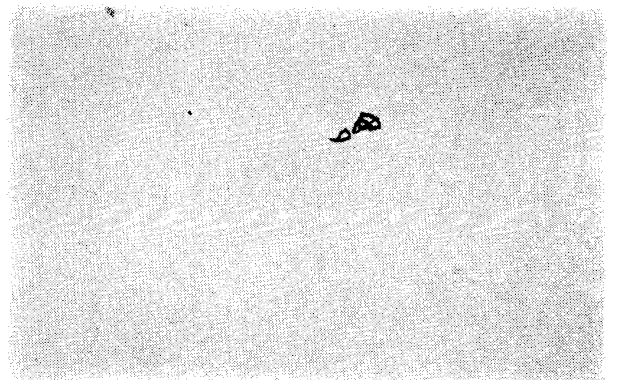


図 20

これまでの事例では CA と MA がほぼ同一か、MA が CA より高い子どもについて検討してきた。そこでは MA は絵画と直接の関係はないが、2枚目の反応を規定したり、表現力に何らかの作用を及ぼしていることが推測される。絵画は、児童においてはむしろ知能的なものも包括して、人間的な質の理解を可能にするものと考えられるから、われわれはとくに MA や IQ にこだわつて画面をみる必要はない。しかし、1枚目がたよりなく2枚目も1枚目よりずつと力が落ちるという画面では、それを描いた子の MA がふしぎに CA より低いという事態が発見された。この事例10は CA3 : 3才の子が描

いているが、MAが2:11才なので、ぐるぐるまわりの線だけ、それも右手の手なりの線である。こちらの質問にも無言であつた。そして2枚目はイマカイタノヲモツトタクサンカイテネと要求したが、1枚目と同じ茶色でほんのちよつと描いただけである。モツトということばや2枚目を描くことが、造形意欲を刺激せず、表現にのびがみられないということは、MAの問題とも関連するのであろう。私はこの点について、絵画活動がMA的なものをも包括するというふうを考えるものである。

事例11 (図版21, 22) CA 3: 6才, MA 3: 5才, IQ 98, 女子。

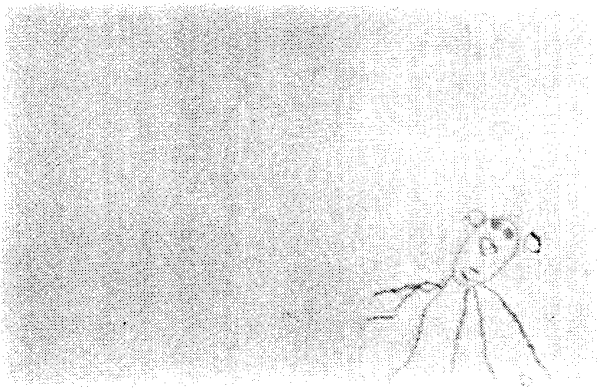


図 21

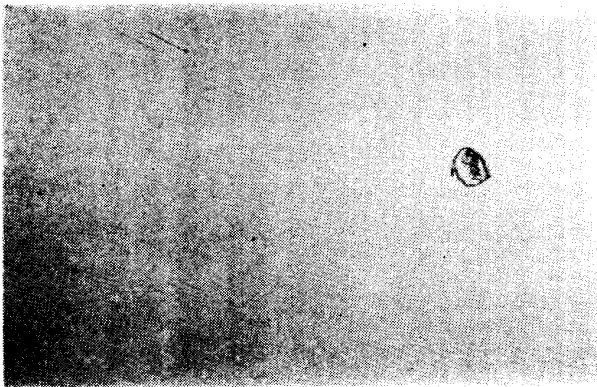


図 22

1枚目は顔の輪郭を水色で、左の耳を赤で描き、あとののこりを全部ピンクで描く。ナニヲカイタノときくと、オカアチャンノオカオと答えた。CAが3:6才になつていたので、顔が十分に描けるわけである。胴がなくて手と足がいつしよにでているような感じは気になるが、さらに気になるのは、2枚目がずつと落ちていることである。いじけてのびがない。ピンク一色で、顔を小さく描いて、オカアチャンノオカオという。MAは3:5才で1ヵ月くらいの低さだから問題はないが、画面にみられるこののびのなさというものは、おそらくこの子

の知能の働きをもまたさまたげているのであろう。生活指導の面で何らかの方法がのぞまれるのではないだろうか。

事例12 (図版23, 24) CA 3: 6才, MA 3: 3才, IQ 93, 女子。

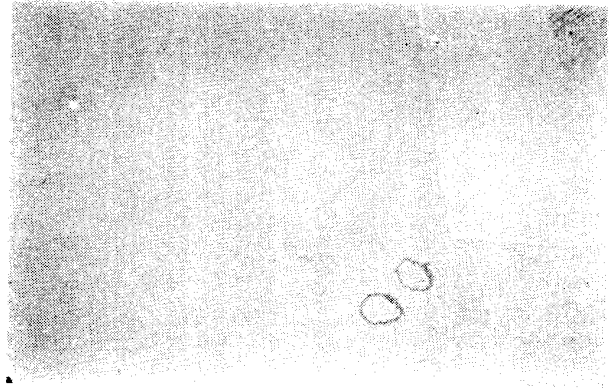


図 23



図 24

1枚目2枚目ともピンクで描き、説明させるといづれもマルだけしか答えない。CAが3:6才なので手なりのマルと逆まわしのマルが描ける。そしてまるのような簡単なもののばあいは、MAが低くても2枚目に数の増加がみられることがわかる。しかしCAが3:6才にもなつていてのだから、もう少し複雑なものが描けることを望みたい。形がこのままであるなら色が変化するか、マル以外の事物を連想するとかの働きがほしいと思うのは欲ばつていゝであろうか。

事例13 (図版25, 26) CA 3: 9才, MA 3: 7才, IQ 96, 女子。

1枚目はナニカコと考えて黒で顔をかいた。オメメトオハナトオクチトという。ナニカイタノときくとオカオ。ソノオカオモツトタクサンカイテネと2枚目を渡すと、数は増えたが、のびのびせず形も明瞭でない。オチャカ

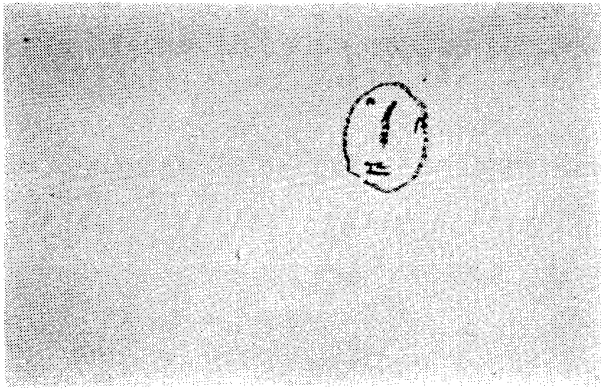


図 25

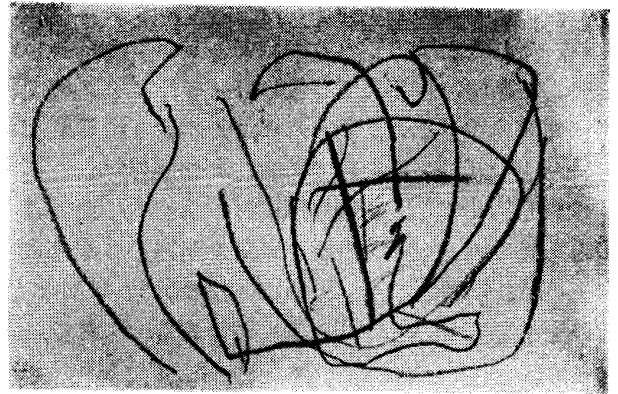


図 27

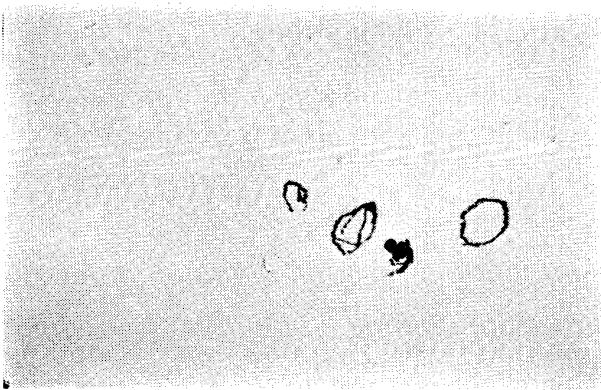


図 26

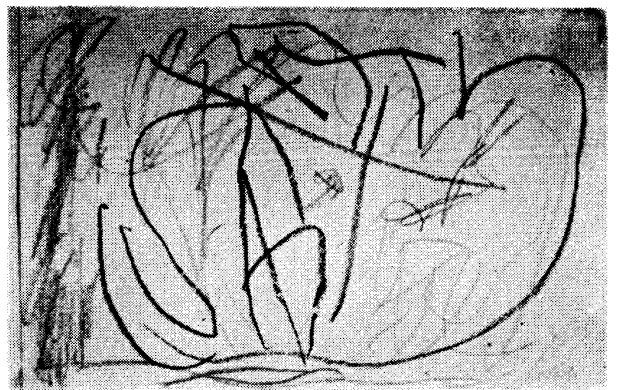


図 28

ナと説明する。CA が 3 : 9 才だから顔は描ける。しかしひどく単純で、意欲が感じられない。説明もたんにオメトオハナでは、3 : 0 才くらいの値打しかないといわれても仕方がないだろう。しかし、モットクサンということを増すこととしてうけとめ、2 枚目を処理していることは、生活体験からくるものである。知能のおくれとしてではなく、意欲の増大をはかるような方策がこの子のために、うちたてられる必要があるのではなかろうか。

事例14 (図版27, 28) CA 3 : 11才, MA 4 : 1才, IQ 104, 男子。

CA 3 : 11才といえば、3才児の最年長である。1枚目は青・鶯色・薄茶色などで、まる、十文字などのいさましい組合せがみられた。コレナアニときくとトラという。トラモットクサンカイテチヨウダイネと2枚目を渡すと、紫の十文字、紺の外郭線、左隅を緑で塗り、黒や薄紫で、その間に小さい十文字状を描きこんだ。そしてフウセン、パン、ワレシモタ、ア、ビツクリシタ、ゾウサンヤと説明した。おそらくこの子の生活経験のなかにある動物園へ行つた時のことが、このようなはげしい抽象形態となつてあらわれていると考えられる。

ふつうの形態を超越したところに、意図するものをぶつけようとするこの子の画面は、2枚目のほうが、より力づよく、健全な成長を示している。3才児にはこのような抽象形態はよくみられる。そしてCAが高くなるにつれて状況の説明が詳細になつてくる。この子のばあいは、もう少しゆつくり表現活動ができるように、くらしのなかに立ちどまらせてやる必要がありはしないだろうか。

事例15 (図版29, 30) CA 4 : 1才, 女子。

これは3才児検診以外の機会に枚方市在住の4 : 1才の女子に個人的に描いてもらつたものである。MAは測定していないが、CAよりかなり高いであろうことが想定される。1枚目はナンデモスキナモノといわれて薄紫でチヨウチヨヤといいながら描いていた。それからピンクピンク、イロンナイロ、メカコ、イロンナイロカイテコ、メ、メハチヨツトカタチンボヤナなどとおしやべりしながら描いたものである。ナニヲカイタノときくとチヨーチヨトオニンギョヤ。ドツチガスキ? リヨウホウヤオニンギヨニシヨウ。ジャオニンギョウヲモットモットクサンカイテネといつて2枚目を描いてもらつた。2枚目は中央に水色の人物が手をのばしており、赤い消防

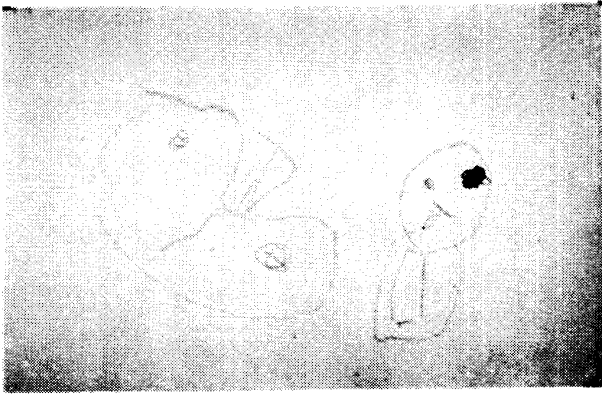


図 29

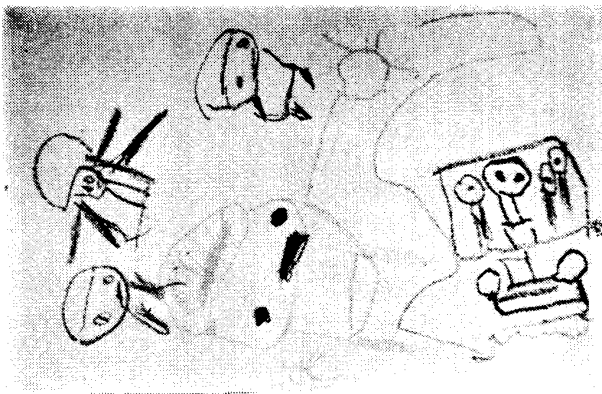


図 30

自動車、なかに赤色の人物と緑色の人物、向つて左には3人の緑色の人物がおり、自動車の方へ緑の曲線が延びている。描きながらのおしゃべりはとても楽しかった。「ジドウシヤカコウオモテ、ジドウシヤノアンテナカラサキニカイテンノヤ、ポシャントナルカラコレコンナニシテンノヤ、ジドーシヤウンテンシユ、コレナ、マッテハツテナ、オオキイカラ、ノレヘン カラマッテハンノヤ、チッチャイノノレヘンナテ、ココノッテフンデイカハル（緑の人物を自動車の中に描いて）ノラハツタマタコツチニカイトコ、ミチ、イシ、イイミチトオツテイカハンノ、ミチガヒロクナツテココカイテコー、カイテコノヒトハコツチイコオモテタカラコツチイコオモテ、ポコポコイカハツタンヤ」である。描きながら、いかにも楽しそうにつづくお話は、絵画がたんなる形や色の問題ではなく、子どもにとって、全体験を総動員し、生活に密接にむすびついたことがらだと思わせられた。この画面は、CA4 : 1才とはいえ、完全に3才児を通過して、

自由な表現と説明の段階—4才児に移っていることを示すものといつてよいであろう。1枚目から完全に複雑な具象性をもち、2枚目で選択し、状況設定が変化し、色彩も多く、話題も豊富で、生活体験が、子どものなかで十分に燃焼されていると考えられるのである。

3才児検診のときも、子どもたちは、いろいろおしゃべりをしてくれた。場所的な制約、初対面のきまりわるさ、そんなものを吹きとばすような元気さで、男の子は男の子なりに、女の子は女の子らしく、画面につれて、いろいろなことを語った。男女の相異については、この小論で触れえなかつたが、それぞれのお話は、そのまま文学作品でもあつた。そして絵画はまた、芸術に関する本質的な問題を指し示していた。しかしそれについては、稿を改めなくてはならない。ただ子どもたちが、実に熱心に描き、どの子もどの子もなかなかクレオンを離そうとしなかつたことを付け加えておきたい。正確には、眠くなつたり、人みしりをして泣いて描かなかつた子どもの数は、0.5パーセントである。

4

以上、3才児の絵画について、大津市の3才児検診における問題を参照しつつ述べてきたが、これらは、いずれもこんごの展開をまたねばならないことがらである。問題としては、3才児の内部にのみとどまるものではなく、2才児や4才児その他の年令の児童とも比較されなければならないことがらであろう。またここで試みた絵画による実験の手続についても、もつともつと検討しなくてはならないものである。けれども、3才児たちにとつて、絵画を描くということは、かれらの生命の直接的表現であり、しかもその生命は、きわめて具体的な、生き生きとした、生活体験と密着したものであるということへの理解を確立したのは、重要なことであつた。そして、その人間的な質は芸術制作を通して最もよく表明される筈であり、そのような芸術というものの意味についても、われわれは繰り返えし考察を深めなければならない。子どもの生命が、何かをいつばいに感じとつたとき、画面は力を増し、輝きを加える。われわれは、児童にとつて絵画を描く営みが、児童の全人間性にとつてきわめて大切なものであることを改めて認識し、こんごの問題展開と3才児対策に資したいと思う。